あったかいがいいね

シャローム横浜通信 10月号

皆様の笑顔

日中の日差しはまだ厳しいものがありますが、朝夕は過ごしやすくなってまいりました。

今年は夏の気温が非常に高かったと感じておられる方も多いと思います。気象庁から6月から8月までの平均気温は平年比1・76度高く、観測を始めた125年間で一番高かったとの発表がありました。特に北日本の気温が3度近く高くなったことと、雨が降らないことによる水不足のため、農作物が生育不良になるなどの多大な影響が出ています。今後も地球温暖化による海水温の上昇などで線状降水帯による豪雨など、各地で様々な自然災害が起こると予想されますので、シャローム横浜でも防災対策を含めて様々な準備を進めてまいりたいと考えております。

先日、特養で夕涼み会のイベントを行いました。このイベントは相談員を中心に4月より検討を重ね、3階・4階を別日で夕食後より2階の中庭に体調不良者以外のご利用者を誘導して、アイスクリームやジュースを楽しみながらの花火鑑賞会を実施しました。このイベントには、当初ご家族にも参加していただく予定でしたが、7月に4階でコロナウイルス感染症のクラスターが発生したことと、終息後も職員数名が感染するなど、落ち着かない状況が続いたこともあり、残念でしたがご家族の参加を見送ることになりました。当日は開催時間が夕暮れ時で外がまだ明るかったのですが、20分間ほど噴出花火やナイヤガラ花火を見ることができ、夕焼けを見ながらの花火に「きれいだねー」「来てよかった」との声も多くあり、ご利用者の笑顔をたくさん見ることができました。また、会場で職員が個別に写真を撮るなど、参加できなかったご家族に対する気遣いもあり、本当に多くの職員に支えられて実現することができました。

国内で初めてコロナウイルス感染症が発見された2020年1月20日以来、3年半ぶりの開催となりましたが、今後もご利用者や職員の笑顔のために感染対策を行いながら様々な取り組みをしていきたいと思います。

施設長　髙原 信夫

新たなコミュニティー

最近、ご利用者の中で花札がブームになっています。

あるご利用者が「トランプやオセロはもう飽きてしまったの。花札とかないかしら・・・。」そう声をかけられた職員が花札を用意すると、とても喜んでくださったのですが、「困ったわ。役を忘れてしまったみたい。」と残念がっていました。そこへ別のご利用者が「あら花札？わたし役分かるわよ！」と教えてくださり、普段あまり関わりのなかったご利用者同士が、花札を通じて新たなコミュニティーができました。昼間のレストランでは、トランプ・オセロ・花札・読書・TVと、皆様思い思いに過ごされています。

4F 課長　松岡 勇次

第 278 号
令和 5 年 9 月 15 日発行
（毎月 1 回 15 日発行）

責任者：施設長 髙原信夫
〒241-0802
横浜市旭区上川井町 1988
社会福祉法人アドベンチスト福祉会
シャローム横浜

編集委員
小林・荒金・石橋
☎045-922-7333

https://www.adventist-welfare.jp/yokohama/

あったかいがいいね

心を込めて支援しています

相談企画課の古澤広行と申します。私は２００８年に就職し、今年で 16 年目となりました。就職以来、特別介護棟（3F）にてケアワーカーとして勤務させていただき、現在は一般虚弱棟（４F）のケアマネージャーとケアワーカーを担当させていただいております。

施設での共同生活の中で、ご利用者の一人一人が不便な思いをなるべく感じる事なく、ご希望に沿った生活が継続できるよう心がけ、支援させていただいております。

ケアマネージャー　古澤 広行

皆様にピザをご馳走しました！

９月３日、栄養課の行事でピザを焼き、ご利用者の皆様に提供しました。皆様、笑顔で、「美味しい、美味しい」と、ニコニコしながら召し上がってくださいました。ピザは、ミックスピザとシーフードピザの二種類でした。ミックスピザには、たまねぎ・サラミ・ピーマン・トマト・マッシュルーム・チーズがトッピングされており、シーフードピザには、えび・あさり・いか・ツナ・ミニトマト・チーズ・マヨネーズがトッピングされていました。

来月 10 月の行事はラーメン屋台になっております。よろしくお願いいたします。

栄養課課長　小寺 秀偉

心の清い人たちは、さいわいである

第 186 回　チャプレン　上前 至

今から 40 年以上前のこと。当時、私は私たちの神学の最高学府機関であるアンドリュース大学院で宗教学（キリスト教史）を学んでいた。その一貫ということでもないが、ある時、そこで話されていた黒人の牧師さんから彼が実践していた刑務所伝道の話を聞いた。それも対象は少年達とのこと。いわゆる日本で言う教誨師のような働きである。そこには、聖書の話しも聞いたことがない少年達が多くいるということだった。その教誨師曰く、「こうした働きに興味のある方は、どうぞ今度の〇〇日に行きますので、ご参加ください」とのこと。米国でそうした機会はなかなかないと思い、次の〇〇日に私も参加することにした。行って驚いた。ミシガン州のデトロイト市という地域性もあるかもしれないが、その少年刑務所？のようなところに入っていた少年達は、皆、黒人であった。私は、そこに米国の低所得者層にみられる黒人への社会的差別問題の存在を意識せざるを得なかった。「何故、黒人の人たちばかりなんだ？」ということだ。と同時に、そこにいる黒人少年たちの中に、聖書の勉強にとても熱心に取り組んでいる姿を見たのである。それを指導している黒人教誨師の牧師さんは「彼らの中には洗礼を希望している受講者も何人かいるんですよ」と言った。ある少年は、その牧師に向かって熱心に目を輝かせて質問していた。その姿を私は今も忘れられない。その少年は、その檻の中で新たな人生の出発をしていったのではないだろうか。私たちの福祉はこうした人々への働きかけも忘れてはならないと思う。「心の清い人達は幸いである。彼らは神を見るであろう」マタイによる福音書５：８